

沈んで——

パフロロ

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

思いつきで書いただけ

沈んだ艦娘を妄想しただけです

なので続きません

# 目次

沈んで

1



# 沈んで

——沈む

沈む……………

あれは……………艦装

『私の』、艦装……………

私は……………轟沈した

——後ろから撃たれた。

——撃たれた？誰に……………？

この艦隊で被弾したことのない私が……………？

いや違う……………油断はしていなかった  
護ろうとしたんだ……………

誰を……………？

私は『艦娘』

提督のような人間ではない

他の娘もそうだ

死ぬことはない

所詮、”艦”としての魂が抜けるだけだ

でも、私は『死んだ』……………？

——なんだろう、不思議な感覚

存在理由以外は、人間とほぼ同じ私達も、こんな『死』を意識する事なんてない

——ああ……あれは何だ……

………あれは……私の服だ

この暗い水の中を、裸のまま沈んでいつてる

冷たいなんて感じない

——“冷たい”………？

冷たいってなんだろう？

鎮守府で食べたアイス？

違う……それは幸せな‘、冷たい‘、

これは……不幸せな冷たさ

変な話だ……冷たさが分からない今、冷たさについて考えるなんて……

』

何かが聞こえる……

ああ、通信か……

——でも、私にはもう聞き取れることは出来ない

そういえば以前、提督がこう言っていたな……

『——お前達は沈ませない。沈んでも見つけ出して、連れ帰って来る。』

あれは、本当なのかな

——本当に、見つけ出せるのかな？

——私は、どうなってしまうのだろうか……



このまま、海の藻屑になるのかな

(——あの娘は、元気でいてくれるかな)

?……『あの娘』って誰だ?

——思い出せない

一緒に暮らしていた最高の仲間

誰……………?

あなたは誰?

私は……………何?

これは何だ?

……………これは、髪だ

私の髪だ

——そうだ……提督にこの髪を褒められたんだ。

——そうだ。‘、彼女’も髪が美しかった。

私が軽く嫉妬するくらいだったんだ

そうだ

彼女を助けようとしたんだ

意識がはつきりとしてきた

そうだ、私は助けることが『できた』んだ

仲間を……護れたんだ

「!!!」

叫ぶ

「!!!」

啜う

「……………」

声は出ない

呼吸の度、空気の代わりに水が体内に入ってくる

水圧で身体が押し潰される……

どれくらいししずんでいるのだろう  
どちらがうえかもわからない

いしきは、とぎれとぎれになっていく

なんでたすけにこないの？

たすけにくるっていったよね？

わたしをたすけにきてくれるんだよね？

いしきは、また、きえていく

「……………」

暗い。——いや

此処は？

——身体が動く

私は沈んだ筈だ

——なのに何故、

『ベッドの上に居る』？

頭が重い。

——違う、気持ち的ではない。

これは物理的な重量だ

(!?!呼吸ができる?)

おかしい、周りに水が無い

『ヤットオキタカ』

誰かいる………

「——?」

? 声が出ない

『……無理スルナ、才前ハ産マレタバカリダカラナ』

「ワタ……シ……ハ……？」

『沈ンデ魂ダケニナツテイタカラ、器に入レ替エタンダ。――自分ノ名前、分カルカ？』

――名前？

――名前？

私の名前……何？

『……ヤハリ、記憶ハ無イヨウダナ』

――いや、一つだけ覚えてる

「私ハ……待ツ……」

そうだ、誰かを待っているんだ

誰かは解らない……でも、待たなければならぬ

『……自分ノ名前ヲ思イ出スマデ……ソウダナ、沈ンデキタカラ、《シー》トデモ名乗ツ  
テオケ』

『シー……………』

それが私の仮の名前

『サテ……ソロソロ始マルナ』

私の視界がブラックアウトする

意識が覚醒する

——そこは意識の中で無意識に存在する場所  
海上だ

——目の前には、数人の少女

「――ヲ級、数1!!第二艦隊!一斉射撃!!」

無数に飛んでくる“それ”を、私は本能のまま防いでいた

――倒さなければいけない

(アレハ……『敵』)

「――助ケテ……」

頭の片隅にある、『待つ』と言う言葉も、いつしか消え去っていた

――そして口から出るのは、もう自分にとって意味のわからない『たすけて』という四文字だけだった